

# 続・家族理解入門

## 家族の構造理解・応用編

### 第7回

2019/06/15 版

団士郎



むつ市図書館 ギャラリー

今回は下世話な話である。「いつもじゃないですか！」の声も聞こえてきそうだが、まあそこが私の値打ちということで、とにかく人はこのように暮らしている。

正しいことだけをして暮らそうとか、他人の失敗批判ばかりに熱心な人は、何を目標に生きているのかと思う。どちらが正しいかではなく、それぞれ上手くやっているなあというのが、望ましい社会だろう。

そこには人が長年培ってきた知恵の蓄積がある。それを新情報やマメ知識で、安易に上書きしようとするのは思い上がりだ。

先人はたくさん間違いを経て、たくさん到達点を経験してきた。私達はそこから始まった今を生きている。そこには成果だけではなく、危うさもいっぱい含んでいる。

今が一番先頭だと思ってもいいのは今日だけである。誤りではないが、明日には最先端ではなくなる今日に過ぎない。今日を誇りすぎるものではない。

そんな時見ておきたいのがここまでの歴史だ。どの説明を採用するかではなく、積み上げられた事実は存在する。それは整理されたものばかりではない。記録や記憶から溢れだして、どこかに埋もれてしまった出来事の数々も人は重ねてきた。これからもそうだろう。

そんなこんなを含めて、家族の物語を理解しよう。

## 七 夫の不倫、妻の輪舞

私が非常に面白いと思った過去の二人の院生の修士論文について書く。

一人は離婚が増加する今日の日本社会において、男性の不倫が果たしている『婚姻維持機能』に焦点を当てていた。

アメリカでは実親、実子だけで構成される家族が25パーセントを下回るまでに結婚、離婚、再婚が繰り返されていると聞く。現在、日本の離婚率も高くなってきているが、まだアメリカほどではない。

離婚の多い社会で、離婚しない選択のカップルには、どのような工夫があるのか、どんな秘訣があるのか？離婚を否というのではなく、離婚しないカップルの秘密に関心を向けたのは着眼として興味深い。

「愛がなくなったら、さっさと離婚したらいい」という主張は、はいはい、と応ずるしかないほどつまらない。

もう一人は社会人入学の女性が、「社交ダンスにおける性と生」というテーマで、中高年女性に偏った日本の社交ダンスの果たしている役割を研究した。中高年カップルの趣味としての社交ダンスではない。

ソシアルダンスは世界的なものだが、日本社会における浸透度とスタイルには、日本近代史とも重なった独特のものがあるという。

両研究ともに、該当者にインタビューを実施し、興味深い実態を聞き出していた。

### ああ結婚

今日の婚姻制度は、結婚への期待の大きさに反比例して崩れていっているところがあるように思う。

アメリカは離婚が多い社会ではなく、結婚が多い社会なのだと、大学院のかつての同

僚は云っていたが全くその通りだと思う。

「前の前のお父さんの子と、新しいお母さんの連れ子が、仲が悪くて・・・」などと複雑なゲームのような人間関係を作り出しているのは、男女の親密関係至上の結婚に期待しすぎる人たちである。

そしてそこに育つ子ども達は、選べない人間関係を次々と新たに付け加えられる。そんな背景もあって、アメリカの子達は、とにかく一日も早い自立なのだろう。

### 児童文化

ずいぶん昔だが、児童文化について書いたモノを読んで感心したことがある。日米の子ども文化の比較論だった。

そこでは大人にならなければつまらないアメリカと、子どもの年齢に合わせて児童文化装置を整えている日本社会という話が述べられていた。

無論、全員がではないが、アメリカの中流小市民が暮らす郊外の美しい住宅。そこは子どもにとって、一人ではどこにも出歩くことの出来ない場所だという。確かにアメリカのお母さんは、しばしば学校に我が子を送迎（自家用車で）するし、子どもスポーツクラブにも送迎していた。（これと連動してアメリカでは、子どもだけで自宅に留守番させたりするのは、児童虐待である）

子どもは運転免許を持つまでは、移動の自由を制限された状態だ。親の車を借りてとか、勝手に乗り回してぶつけてとか、アメリカ映画のエピソードには良く登場する話だった。つまり、免許の取れる年齢になるまで、すべてが子どもなのだ。

国土や人口密度と関係しているのだろうが、日本の子どもの行動制限は、年齢段階

的に形成される。

典型的なのが雑誌である。幼稚園、小学一年生、中2コース、蛍雪時代等など、各年齢に合せた雑誌が刊行されてきた。背伸びして大人文化に届くまでは我慢を強いられるような発想ではなく、年代別の児童文化を形成してきたという。

アメリカにはそういう児童文化の発達は少ないという。私になじみ深い漫画文化を見てもそれは言える。日本の漫画は読者年齢別に作品群がふんだんに準備されている。アメリカンコミックスのメジャーなものに、そんな意識は感じられない。

## 離婚

考えてみよう。両親の離婚に伴って住居の変わる子どもは少なくない。当然、それまでの人間関係等は精算される。そして新しい場所で、初等教育の場面に適応を強いられる。

ところがこれも又、長続きするとは限らない。新たな結婚に巻き込まれた子どもは、親の新パートナーとの関係構築、そして新たな学校や地域社会での適応にチャレンジしなければならない。

心理臨床的に集団不適応等と分類され、援助されている子がある世の中で、健気にも適応に邁進する子ども達。

私の転校経験の記憶を振り返ってみても、これはなかなか大変だと思う。

こんなことを思いながら、夫婦、家族のことを思案していたら、『アメリカのカップルにとって子どもの出産は、夫婦両方にとって、結婚満足度を低下させる要因であることは、広く認知されている』という記述に出会って驚いた。

けっして暴論などではなく、アメリカでは数多くの研究結果として承認されていること

だという。

ところがこの視点からの研究が、日本には皆無らしい。そもそも日本人研究者に、こういった発想がないのだと書かれているのを読んで腑に落ちた。(柏木恵子／平木典子著「家族の心はいまー研究と臨床の対話からー」東京大学出版会 2009年刊)

これはとても興味深い話だ。私個人も、多くの日本人と同様に、「子どもが夫婦満足度の減退要因である」と語るのには違和感があった。

ではそれはアメリカだけの特殊事情かと考えてみると、そうではない。事実として、子育てにおけるアンバランスな負担から生じた夫婦不和はよく耳にする。

それをどう受け止めて語り、対応するかの点に、日米で大きな差があるのだろう。ここに発生している差違が、今回述べることと強く関連しているように思う。

継続、維持することに価値を感じる者と、新しく作り直すことに価値を感じる違いが、国民性なのだろうか、社会が作り出す文化なのだろうか。

長年子どもに関わる仕事をしてきた私には、両親という名の男女が、男女関係ばかりにひたすら執着し続ける社会が、そう健全だとは思えない。ただ、こういう考え方は日本的発想だといわれるかも知れないことは自覚していた。

そもそも家族の中のカップルを考察する時、「夫婦」中心の発想で語るのか、「両親」中心の発想で語るのかは重要である。私の軸足は、両親機能の方に比重が大きいといえるが、これは私個人の見解だけではなく、日本の家族における役割意識と深く関わっているだろう。

様々な婚姻に関する昨今の情報が過剰に流布された結果、結婚に慎重になりすぎたり、結婚への期待が肥大化したりすることになる。結婚したくない人が独身なのはいつ

こうに構わないが、結婚に期待過剰な人たちが、しそびれている部分も小さくない。

日本でどんどん増える離婚も、結婚への絶望で踏み切られたものと、もっといい結婚をと思って別れる両者があるようである。だから再婚も多いのだろう。

昨今の児童虐待を巡る厳しい世論の構成にも、今日の日本人の結婚に関する思いが集約されている。

「カップルにとって子どもの出産は、夫婦両方にとって、結婚満足度を低下させる要因である」、この認識を社会全体が共有することで、児童虐待問題への世論形成をもう少しまともに整理できるのではないだろうか？

児童虐待は容認されるべき事ではない。しかし同時に、結婚がこういう側面を持つモノだと認識できると、子どもの存在が時に結婚生活の阻害要因として働くことがあることになる。

初めての子育て夫婦時代を振り返れば、思い当たるカップルは、いくらでもあるだろう。

## 夫婦

極めて個人的見解だが、結婚を唯一無二の最終選択で、ドンぴしゃの結果に！と思えば、「割れ鍋にとじ蓋」は、それほど悪い選択ではない。

人は誰も、欠点を併せ持った存在だと自覚できていれば、相手にだけ完全を求めるなど、子供じみた技である。相手も自分もいろいろ欠点があるが、それを併せて、今までよりも少しましに、お互いが生きられるよう努力をすればよい。

そこに次世代育てが含まれていれば、それほどの人物でなくても、それなりの満足は得られるのではないか。

「一人(ひとり)口は食えなくとも、二人(ふ

たり)口は食える」と昔の人はいった。そういうものだと理解することも、結婚の成果の一つである。

一夫一婦制の結婚は、制度として私たちの社会が採用した一システムに過ぎない。時代、国や地域、宗教による差が歴然と存在する。そこには唯一無二の男女関係だけに特化した認識をのさばらせてはいない。

夫婦がお互いを信頼しあって、愛情を持って長く関係継続するのは良いことだという意見に反論はない。しかし、それを理由に、そうでなければよろしくないと断ずる信念は何だろう。「男女愛」だけがすべてではない。

## 下世話の愛

そこで、今日の日本社会における「結婚」、「夫婦関係」の考察を始めようと思うが、ここで語るのはいつものことながら、根拠を明示したアカデミックなものではない。下世話な日本社会の今日性を色濃く反映した一考察である。そういう曖昧なモノは好まない方もあると思うが、私にはこういう視点がとても興味深い。

最近読んだ「ジェノグラム(家系図)の臨床」M. マクゴールドリック他著(ミネルヴァ書房刊)の中で語られる、アメリカ家族の様々な記述にも、はっきりと日本の家族との違いを感じている。

どこがどうといちいち具体的に指摘するより、アメリカの家族についてディテールが語られていけばいるほど、差違はぬぐいがたく存在する。

また、ある研究者の報告で耳にしたことだが、韓国家族の子育て戦略にも驚いた。

ティーンエイジャーの英語圏への留学は、韓国社会での上昇志向実現には不可欠らしい。その感覚は日本社会にもある。

しかし、子どもの留学に母親が同行するのは日本ではほとんど聞かない。韓国では、そういう形でソウルに残された単身の父親のことを呼ぶ固有の名称があるほどポピュラーだそうである。

つまり日本の家族はやはり、日本の風土で生まれて、極めて日本的だということだ。

家族の生活は国によって、形成前提がずいぶん異なっているし、そこに働いている社会的制約や規律もずいぶん違う。

それは私にはとても興味深いことであり、その中で形成される夫婦関係、親子関係の面白さは尽きない。

## 家族の心はいま

先にも述べた、「家族の心はいまー研究と臨床の対話からー」柏木恵子／平木典子著（東京大学出版会）はとても興味深かった。特に第一部、「すれ違う夫と妻」において述べられていることは、今回の原稿を準備していた私にはとても面白かった。

夫婦の結婚満足度の質と、離婚について述べてあるところは、私が今回取り上げている論文と深く関わっている。

この論文では、日本のカップルが離婚をしないで、婚姻を維持継続してゆくために採用していると思われる戦略的行動に注目している。

夫婦の親密さの重要性や、結婚生活の満足、不満足と、その結果としての離婚選択という、ある意味でまっとうな議論の展開を採らないカップルの、「離婚はしない、しかし・・・」という選択肢の存在が示されている。

カップルがより満足を求めることで離婚が増えるとするならば、その要求を限定することで、関係維持を目指すのは虚偽だといえるだろうか？

「愛がすべて」か「愛以外、すべて」かは、少々乱暴だが、突きつけられた選択肢だ。

## 『婚姻関係維持装置』 としての不倫

もともと、初めからこんな発想で論文を書くこととする者は先ずないだろう。彼もカップル・コミュニケーションを自分の関心の中心においていた。そして今日のカップルの男性は、どのような手段(方略)で、カップルであることを維持継続する工夫をしているのだろう、という関心だった。つまりカップル(夫婦を含む)関係維持における戦略と技術がテーマだった。

動機の一つは自分自身が恋愛関係の渦中にあることだった。当然、別れたカップルの話もよく耳にするし、離婚の増加もいわれて久しい日本社会の現実がある。青年期の彼には、必然性の高い関心だった。

そんな中で、上手に長く関係を維持している人たち(男性)は、いったいどのような工夫をしているのだろう。その実態を調査したいと考えた。そして、この件で何人かにインタビューを試みた。

ところがこの作業の答えは、少し考えたら分かると思うのだが、陳腐きわまりないのである。

何人かから、「記念日には忘れずプレゼントをする」とか、「月に一度は外食をする」など、いかにもありそうな話が横並びで出てきた。こんなエピソードを集めても論文にはならないと彼は思った。そしてテーマを再検討しなければと考えるに至った。

## できちゃった婚

カップル・コミュニケーションについての関心はつまらないものではない。婚姻の形態は世界中で様々に変化している。

近年、二十五歳未満の結婚の過半数を占めるに至った「できちゃった婚」というの

は、極めて今日の日本的な現象であるらしい。

若年層や未婚の妊娠が増加しているのは、日本に限ったことではない。しかし、妊娠が発覚すると、それをきっかけに早々に入籍するという保守性(と言うか、遵法性)は、かなり日本に偏っている。

未婚の妊娠という旧来の習慣破りと、結婚・入籍という、保守性が共存する日本のできちゃった婚(「おめでた婚」などと言い換えたりもする)ブームである。

ちなみに、少子化に歯止めがかかったと聞くフランスは今、国全体の出生届けの半数以上が事実婚のシングルマザーだという。そこには国の家族制度デザインが大きく関わっている。

人の行動選択は流動的である。フランスでは今、父子の血縁関係について男性の持つ疑念から、DNA鑑定が一寸した話題らしい。しかしフランス国内では検査が規制されているらしく、検体をスペインの民間業者に送ったりしているらしい。ところがその検査というのが信頼に足るモノかどうかの疑念が生まれ、いろいろ複雑なことになっているらしい。

グローバル化する一方の今日社会において、各国の若者の行動がそう大きく異なるとは思えないが、社会の中に落とし込む流儀は、国によってずいぶん違いがあることになる。そして出生率の変化のように、結果はいつも出るのである。

継続的なカップル・コミュニケーション問題が、世界的にもこういう渦中にあることは、「家族」と付いた社会学や心理学に関心を寄せるなら、広角に捉えておかなければならない。

## 不倫

そんな土壌における日本のカップル問

題。日経新聞の朝刊に、渡辺淳一が不倫小説を延々と連載し、本がベストセラーになる風土はわが国の特徴的一面かも知れない。そこで彼は切り口を、百八十度転換し、世俗的にはネガティブだと思われる側面に設定した。

婚姻関係にある男性で、不倫中の人。婚姻関係にありながら、他の特定の相手と一定期間以上の継続的親密関係にある男性の結婚意識調査を試みることにした。対象となるのは、「それでも離婚をしない人」である。

妻に発覚すれば、直ちに離婚だ、慰謝料だという事態に発展しないとも限らない状況を抱えながら、離婚しようとならない人。つまり結婚を維持し続けようとする人の意識や行動に焦点を当てた。

## インタビュー

なかなか興味深いと思われたこの調査プランだったが、初期には机上の空論になりかけた。当然だろう。そんな都合のいいインタビューイ(被験者)をどうして見つけるのか。アンケート調査するわけにいかないし、万が一そんな調査に回答して発覚でもしたら、対象者の私生活は崩壊である。一人目の調査対象に遭遇するまでが、とても難しかった。

匿名でも、電話インタビューでもとハードルを下げて、友人、知人などの噂の中から、そういう関係にある人に、隠密裏に打診し続けた。そしてとうとう一人目のインタビューが面談で受けもらえることになった。

基本的に固有名詞は使わない。不要な事実関係についても、詳細化はしないということで、初めてのインタビューが行われたが、かなり緊張を伴うものだったようで、かならずしも十分なものではなかった。



しかしこれがきっかけになってインターネットでの打診や、知人の知人というようなルートから、徐々に面談できる男性が現れた。

途中で今回の調査対象者ではないと判断されたのは、現在の婚姻を解消して、新たな相手と結婚したいと思っているが、まだそこに至らず、不倫状態にある男性だった。

この違いを明らかにすることも、カップルの関係の有り様の明確化になると考えていた。

しかしこの調査計画には指導教員の中でも賛否があって、批判的だった女性教員は、「そんなものどっちだって同じだ！」と憤慨していた。

結果的に調査にこたえてくれた人は十名を超した。そしてかなり高率で一様に、不倫関係が始まってから、夫婦関係が良くなったと語った。

もともと、答えている男性が不倫関係にあるのだから、自分に都合のいい解釈をしているのだとか、後ろめたいから気を遣うようになっているのだと批判する意見も絶えなかった。

このインタビューの中に、相手の女性が乗り込んできて修羅場になったというような話がなかったのも意外だった。世間によくある物語はたいていそんな場面を想定している。しかあい実際に継続する関係は、そういう可能性を、厳しくコントロールしているようだった。

それと関連して、なるほどと面白く聞いたのは、不倫男性が一番警戒心を持っているのは、近い同性(同僚や友人)の持つ、嫉妬心とケアレスミスだという話だった。

同性友人への打ち明け話(自慢?)として不倫を告げた時に生じるヤキモチは要警戒だという。そこから発覚して、家庭が大混乱になることを非常に警戒していると語った人が多い。

調査結果としてそれほど目新しい知見が

得られたとは言えないかもしれない。

ただ、「婚姻関係継続維持」という観点から見ると、かなり多くの既婚日本男性に選択されている形式だった。

女性に関しては今回、調査対象外であったので何も言えない。しかし予測としては、同一文化の中で、不倫関係を選択している女性が同数いるのだから、意識の差はあるだろうが、異なった前提で存在はするだろう。

この調査時点で、女性側には未婚者が多かった。しかし、時と共に世俗的变化を見ると、性差の問題ではなく、この方法が採用されてきているのを裏付けるようなスキヤンダル記事も増えている。

そしてこのカテゴリーの人達は、それなら離婚して、新たな相手とやり直せばいいという意見、立場とは、棲み分けられているようだった。

共通する特徴的な聞き取りは、こういう認識が広く日本社会で共有できていることを示している。カップルの間に秘密が存在するのだから、それだけでもう許せないという結婚観の一方で、こういう経過を持ちながら継続されている婚姻の存在が、かなり幅広く存在していることが示された。



女として何となく母を怪しいと思っていたマセガキの私は、母のメールボックスを盗み見ました。



母はとても若々しく元気な人です。



なにこれ

見ると怪しげなメールがちらほら。

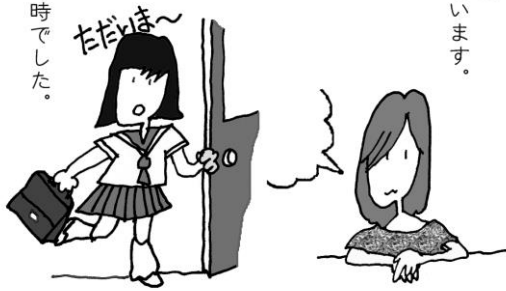


慌てて元に戻して、でもショックで放心状態になりました。



その秘密を私は知っています。

中学三年の時でした。



それからは母の顔をまともに見られず、話しかけられても拒否感があつて、強い反抗期状態になりました。

どうしたのヨ



置いてあつた母のケータイをいじっていました。







そんな状態は高校二年まで続いて、母は度々、苛立ちました。



今、本当のところはどうなのかも知りませんし、もう知ろうともしません。



気にもしていない父にも、ちよつとイラツとしていました。



あれは母がイキイキできている秘訣。だろうと思っからです。



現在、私は大学生になって、母のゲームを黙認しています。



## 「社交ダンスにおける性と生」

このテーマで研究を進めることになった

女性も最初、全く異なるテーマ「中高年男性の自殺問題」を研究したいと考えていた。

日本社会における今日的な大問題であり、先行する研究や実態調査もある。無論、まだ新たに試みられなければならない調査・研究も数多くあるだろうし、三万人を超えたまま定着してしまった日本の自殺問題(1998~2011。その後二万人台に減少している。しかし、毎年二万人は決して少ないとか、減ったと語れる数ではない。先進国と言われる国々の中では突出して多いのが日本だ)は社会的課題である。

今日社会における必然性を持った大きなテーマであり、加えて彼女自身の側にもこれを選択する必然を持ち合わせていた。

だから修士論文の範囲でという時間的制約の中で、テーマのどこに焦点を絞るかがポイントだった。そんな中で研究は、彼女にとってどんどん重苦しいものになっていった。テーマの適否もあるが、彼女がこの研究をし続けられるかどうかの判断が必要なタイミングだった。

## 変更

そこで、「もし他にテーマを考えるとしたら何に関心がある？」と尋ねた。当然のことだが、この研究をしようと大学院に入学してきた彼女に、他のプランはなかった。そこで、「好きなものって何かある？」と聞いた。「どういう事ですか・・・」と戸惑う彼女に、「自分の生活の中で、好きだといえる継続的関心事項はなにかある？」と聞くと、「社交ダンス！」とこたえた。予想外の話題に驚く私に、彼女はしばし社交ダンスのうんちくを語った。

映画「shall ウイダンス」のヒットなども手伝って、一部でブームも起きた社交ダンス。TVでも、「芸能人社交ダンス部」などの番組が放映されていた。彼女は嬉々として社交ダンスと競技ダンスの棲み分けを語り、

若い人(大学生等のサークル)は競技ダンスを目指している現実があると言った。

私は全く踊りが苦手だし、社交ダンスをしようと思ったことはないのだが、中年女性にダンスが人気のあることは知っていた。フラダンスやフラメンコなど、様々なカルチャーセンターのメニューの一つとしての社交ダンスという認識もあった。

ところが決定的に認識不足だったのは、男女カップルをはっきり意識しているダンスは社交ダンスだけだということだった。そしてこれが、日本社会で社交ダンスが定着することを妨げた一要因でもあると聞かされ、興味を持った。

社交ダンスは性と生の饗宴ですと熱く語るのを見ていて、死(自殺)のテーマと、性と生のテーマの彼女の中での共存は必然なのかもしれないと思った。

社交ダンスのそういう面のことなら、通っているダンス教室に、たくさんインタビューできる人も居ますと言う。そこでとりあえず、社交ダンスに傾倒する中高年女性に、質問には幅を持たせてインタビューをしてみる事になった。

## 性と生

この段階ではまだ、彼女の語る性と生の饗宴がピンと来ていなかったが、徐々に集まってくるインタビュー結果を見ていると、あまり考えたこともなかったような語りが、繰り返し登場した。

その中でも、非常に興味深かったのは、中高年夫婦が共に社交ダンスを趣味としている人は少数派だという事である。

多くの四十、五十、六十代の女性がダンス教室には一人で通っている。そして若い男性ダンス教師と踊ることを、殊の外楽しみにしているという。

大会に参加するために新しいドレスも購入する。しかし高額であり、他に着て行ける

場所があるものでもないから、ドレスのことは夫には内緒という話がいくつもあった。

中には、「自分が社交ダンスを十年もやっていることを夫は全く知らない。言えば絶対に反対するから言わない。もし自分が先に死んだら夫は、ダンスの引き出しを開けて、手紙とダンス衣装を発見することになる。そこには、あなたの知らない私があったのよ」と書いてあるのだと言った。

映画「shall we ダンス」では、主人公・役所広司が妻に内緒で社交ダンスを習う。もともと、内緒は妻だけにではなく、誰にも内緒なのだ。

この映画にも「社交ダンス」ゆえの秘密が存在する。日本社会における社交ダンスは、男女関係の強い投影を排除することは出来ない。

中高年女性のダンスレッスン。これは不倫ではない。しかし多くが夫には秘密か、消極的にしか語っていない。話せば夫は反対して必ず止めさせようとする。でも、私にはこれがあるから、今の生活に我慢が出来るのだと語る。結婚生活維持装置という意味づけがここでも可能かも知れないと考えた。

### 社交ダンス史

日本におけるソーシャルダンス史は、鹿鳴館に始まるらしい。そもそもの導入に、条約締結に訪れた外国人懐柔策(もてなし)としての国家的企みがあったのだという。だから当初、踊る女性は、かり出された政治家の子女と、一方では、接客業従事者(芸者など)の女性であったそうだ。

日本社会へのソーシャルダンスの導入は、この段階から男女関係に関する社会と時代の大きなバイアスのかかった存在であった。

こうして始まった社交ダンスの歴史は、ずっと後まで、スポーツの一種とは見なされなかった。戦後からごく最近まで、ダンスホール(ダンスを踊る場所)は風俗営業法で警察

から監督される場であり続けた。

競技ダンス会場として、映画にも登場した英国・ブラックプールのボウルルームとの差は歴然だという。

それにも関わらず、世界中で、プロのダンサーが群を抜いて多いのは日本だそうだ。このダンサー達が生計を営んでいけるのは、もっぱら街のダンス教室の教師としてである。その客の圧倒的多数が、中高年女性というわけだ。

他国では世代にかかわらず、夫婦やカップルが、ソーシャルダンスを楽しんでいる。

### このように

私は今、この二つの研究で明らかにされたものを、日本社会の持つ婚姻関係維持装置と見なしてこれを書いている。

嫌になったら別れて、新しい人と結婚すればよいという考え方を否定はしない。しかし、薄っぺらな関係認識だなどは思って見ている。

関係というものは一色ではない。良いばかりの継続で五十年などというのは絵空事である。いろいろあるから金婚式なども迎えられる。それに意味があるかどうか、本当に幸せかどうかなど検討のしようもないことである。

社会は激変する。子ども達も日々成長(変化)する。なぜ夫婦だけが変わらぬ愛などを安易に宣誓するのだろうか。そんなことをしてしまうから、別れなければならなくなる。

刻々変化するだろうが、一緒にいようと思うと宣言する方が、人間関係の安定、継続を願う子ども達をはじめ、親族や友人、知人にも有り難いのではないだろうか。

そのためには様々な大人の戦略や仕組みが必要である。愛至上の結婚イデオロギーは、意外なほど結婚持続時間を短くし、結婚体験からの学びの少ない中年男女を作り続けている。

子ども達に、必要以上に早くから、両親も揺れ動く中の男女関係であるなどと認識させる必要はない。両親は絶対という自明性から出発して、成長と共に、相対的な関係の一種であることを学ぶに至るのが良いだろう。子どもはそれと並行して、自分の男女関係世界も形成してゆくのだろうと考えている。

初めてこれを書いたのは10年前。この間、様々な時代の変化があった。しかし全体を見渡せば今のところ、決定的不幸を私達の社会が選択したとは言えない。

国内事情を言えば、戦闘もなく、テロもな

く、いちばんの不規則な多数死は自殺のままである。(けっして児童虐待ではない。だから理念ではなく、具体的な数字を比較して論ずることをしておかないと、ヒステリックな少数派が世の中を引っかき回すのに、みんなで手を貸してしまうことになる。)

そんな中で、DV(家庭内での様々な暴力)が話題の中心で、それに加えた男女間の問題が連動的に世間を賑わせている。

どちらが正しいかではなく、もう少し上手くやる知恵を発揮できないのかと思ったとき、この二本の論文のような今日的メカニズムが、あらためて婚姻維持装置として今も働いているのだろうと思った。